

CBI/CLIL for Elementary School English: Benefits and Tips

小学校英語にCBI/CLILを：メリットとコツ

Nozomi Takano

Sophia University

Junko Kambara

Meikai University

Eiko Kedoin

Dai 3 Nippori Elementary School

Yoko Suzuki

Showa Women's University

Reference Data:

Takano, N., Kambara, J., Kedoin, E., & Suzuki, Y. (2016). 小学校英語にCBI/CLILを：メリットとコツ [CBI/CLIL for elementary school English: Benefits and tips]. In P. Clements, A. Krause, & H. Brown (Eds.), *Focus on the learner*. Tokyo: JALT.

内容重視教授法 (CBI)、内容言語統合型学習 (CLIL) は、第二言語の習得と内容に関する知識の習得を同時に達成できる方法として知られている (e.g., Lyster, 2007; Coyle, Hood, & Marsh, 2010)。本論では、小学校外国語活動にCBI/CLILを取り入れる際の言語的 (英語)、認知的、教育的メリットを紹介する。先行研究からの知見に加え、実際にCBI/CLIL授業を行う中で見えてきた利点として、児童の英語、並びに教科科目に対する姿勢が前向きになること、担任教師への尊敬の度合いが上がること、担任教師に自信が生まれることなどを説明する。また、CBI/CLIL授業を行う際のコツ、更に、Hi, Friends! (文部科学省, 2012) に沿ってCBI/CLIL指導案を作成する際、どのような題材・語彙・文法を選び、どう授業を進めるのかについても、サンプルと共に紹介する。

A number of researchers (e.g., Lyster, 2007; Coyle, Hood, & Marsh, 2010) have highlighted the benefits of content-based instruction (CBI) and content and language integrated learning (CLIL), such as enabling learners to focus on two goals at the same time: practicing second or foreign language skills and gaining content knowledge. In this study we examined the linguistic and cognitive benefits that Japanese elementary school students gain through learning English by CBI/CLIL. Pedagogical benefits that affect classroom dynamics are also elucidated, based on the authors' firsthand observations while conducting CBI/CLIL lessons. These benefits include (a) a positive attitudinal change by students towards EFL and content study, (b) increased respect toward their homeroom teacher, (c) increased confidence among homeroom teachers by adopting contents that they are accustomed to teach. CBI/CLIL lesson plans and practical tips using the MEXT (2012) textbook *Hi, Friends!* are introduced.

近年内容重視教授法 content-based instruction (以下CBI) と内容言語統合型学習 content and language integrated learning (以下CLIL) の2言語教授法が頻繁に取り上げられ、注目を浴びている。CBIは、1980年代にアメリカで体系化された英語教育法で (渡辺、池田、& 和泉, 2011)、教科などの内容を外国語・第二言語で教えることにより、学習者がその教科や内容について理解すると同時に、その外国語・第二言語をも学ぶことを目的としている (Brinton, Snow, & Wesche, 2003; Met, 1999)。言語と内容のどちらに重点を置くのか、内容とは何を指すのかについては多様な見解があるが (e.g., Cloud, Genesee, & Hamayan, 2000; Met, 1999; Stryker & Leaver, 1997)、目標言語を媒体として、学習者が特定の内容を学ぶという点においては共通している。一方、CLILは、1995/1996年にヨーロッパで生まれた教育方法で (Baker, 2011)、内容と言語をともに教えるために、追加言語 (母語以外の学習言語) を使用する (Coyle, Hood, & Marsh, 2010, quoted in 山野, 2013)。CLILには、4Cとして知られるcontent (内容)、communication (言語)、cognition (思考)、community (協学) の4つの領域 (渡辺、池田、& 和泉, 2011) の育成を教育理念として据えているという特徴がある。このように、CBIとCLILは、概念は異なるものの「内容を外国語・第二言語で教える」という方法論を共有しており、本論ではCBIとCLILをまとめて、幅広い意味で使用する。

筆者らは、2008年からCBI/CLILを日本の小学校英語に取り入れるを試みをし、公立小学校の現状に合わせた指導案を作成し、実験授業を行い、興味を示した小学校担任教師にアドバイスをを行っている (Takano, Kambara, & Suzuki, 2012)。本論では、高学年児童を対象にCBI/CLIL授業を行った際の筆者らと担任教師の省察と、児童の発言の聞き取り、授業振り返りシート、授業後アンケート (付録A) の分析を通して明確になってきた、日本の小学校英語にCBI/CLILを取り入れることのメ

リットとコツ、および、文部科学省による外国語活動教材であるHi, Friends! (文部科学省、2012)に沿ったCBI/CLIL指導案(付録B)を紹介する。

本研究の対象は、東京都と神奈川県にある10の公立小学校の5・6年生である。男女の構成比はほぼ半分ずつで、中には、外国人を親に持つ児童や、海外滞在経験を持つ児童が少数含まれるが、大多数の児童が日本語を母語とする日本人児童である。1クラスの児童数は、8人というクラスから40人のクラスまであり、英語の授業は月に1回(2008年時点)というクラスから、週に1回というクラスまで多様である。これら10校のうち、8校では英語アドバイザーを置き、担任教師に英語指導のアドバイスをを行っている。この研究のためのCBI/CLIL授業は、筆者らが主に行い、担任教師がサポートに回ったケースと、筆者らがサポートしつつ、担任教師が授業をリードしたケースとがある。授業後に、教員間でフィードバックをしつつ授業を振り返り、ビデオカメラで録画した授業風景や、音声レコーダーに録音した児童の発言・発話を分析した。また、児童が教師に提出する授業振り返りシート(担当教員によって記入させる事項、書式、回数は異なるが、授業内容に関して理解できたか、積極的にコミュニケーションできたか、わかったこと・難しかったこと・楽しかったことは何か等の項目に対して、児童が日本語で記入したり、自由に感想を述べたりする授業・自己評価シート)と、筆者らが作成して児童に記入してもらった授業後アンケート(付録A)46枚の回答も参考にした。なお、2008年度から2015年度の間に、筆者らが実施したCBI/CLIL授業回数(記録が残っているもの)は合計380回、授業を受けた児童数は約1875人である。CBI/CLIL授業を実施した年度、授業回数の詳細、1クラス辺りの平均児童数(クラスサイズ)、合計児童数の詳細は、表1に記す。

表1. CBI/CLIL授業を行った記録の詳細

学校名	実施年度 (年度)	合計授業回数 (回)		クラス サイズ (人)	合計児童数	
		5年	6年		5年	6年
東京都A小学校	2011-15	13	13	8-12	50	50
神奈川県B小学校	2008	8	0	23-26	75	0
東京都C小学校	2009-10	16	32	30-35	130	130
東京都D小学校	2008-09	0	48	34-36	0	140
東京都E小学校	2009	0	48	38-40	0	155
東京都F小学校	2011-12	16	48	36-38	145	150
東京都G小学校	2011-14	22	44	27-35	120	120
東京都H小学校	2015	8	0	37-38	75	0
東京都I小学校	2012-15	32	0	36-38	295	0
東京都J小学校	2012-15	32	0	29-31	240	0

小学校英語にCBI/CLILを取り入れるメリット

2011年度から、公立の小学校では5・6年生を対象に外国語(英語)活動が正式に導入され、その指導は基本的に担任教師が行うこととされている。筆者らが関わる公立小学校の現場では、この新たな挑戦に多くの教師が試行錯誤し、どのように教えたら良いのかを模索している。中には、英語ゲームをしたりビデオを見せたりして、できるだけ楽しく簡単な授業を行うことで、英語嫌いの児童を作らないことに重きを置いている教師もいる。しかしながら同時に、英語の授業にだんだんと慣れてきた教師が、Hi, Friends! だけでは物足りないと感じ始めている現象もある上、児童の中からも「もっと英語で色々なことをやってみたい!」といった意見が聞こえている。筆者らは、このような現場からの声を受け、高学年児童の認知レベルに適合した、思考を必要とする内容を英語の授業に盛り込むCBI/CLILの方法を提案している。筆者らの試みで発見できたものとして、日本の小学校英語にCBI/CLILを取り入れる場合に、児童並びに担任教師が得られる理論的・実践的なメリットを以下に5つ挙げる。

一度に二つ学べる

CBI/CLILは、“Two for one”(Lightbown & Spada, 2006)アプローチとも言われるように、英語と教科内容を同時に指導・学習できる一石二鳥の方法である。児童は、英語という言葉を学びながら、教科内容の知識も得ることができる。笹島(2011)は、知識内容を理解したり伝えたりするためには言葉が必要であり、言葉を学ぶのに内容が不可欠であるため「内容とことばは関連している」(p. 129)と述べており、また、Genesee(1994, p. 2)も“language is acquired most effectively when it is learned for communication in meaningful and significant social situations”(言語は、意味があって、意義深い社会的状況でのコミュニケーションのために学習される時に、最も効果的に習得される「筆者訳」と主張しているように、内容と言語が統合的に学ばれることにより、児童の目標言語能力と内容理解能力を同時に高めることができる。

児童の認知レベルに合わせることができる

児童は、内容が簡単で認知的・思考的に負荷のかからない活動ばかりだとハードルが低すぎて、英語の授業を十分に楽しむことができない。例えば、“How many?”という表現の練習のために、“How many chairs in this room?”という問いかけをすれば、部屋にある椅子を数えるだけの高学年児童にとっては認知レベルの低い活動である。しかし、“How many planets in our solar system?”という問いかけをすれば、児童の知的好奇心を刺激しつつ、思考を伴う英語活動を行うことができる。CBI/CLIL授業では、学年相応の認知レベルに合わせた、アカデミックで深い思考が起こる英語活動が可能となるのである。カミングズ(2011)は、第二言語能力を対人関係におけるコミュニケーションの力basic interpersonal communicative skills(BICS)と、教科学習に必要な認知的・教科学習言語能力cognitive academic language proficiency(CALP)とに分けているが、CBI/CLIL授業では、CALPを育てることができると考えられる。

苦手教科の克服ができる

例えば、小数点2桁の計算が苦手な児童は、その計算練習や算数の授業に対して消極的である。しかし、英語の授業に小数点2桁の計算練習を盛り込むことで、普段とは違った新鮮な姿勢で算数に取り組むことができる。逆に、英語に苦手意識を持っている児童でも算数が得意な場合、計算を内容として扱うことで優位に立て、英語にも自信が持てるようになる。このように、CBI/CLIL授業では、言語学習と教科学習が互いに刺激し合い、クラスルーム・ダイナミクスに変化が見られる。更に、授業中は、教師の言う英語を一生懸命理解しようとし、周りの人が行うことを注意深く観察したり、人のやることを模倣したりしないと、クラスの流れについていけなくなることがあるため、児童の集中度が高まる。その上、教科などの内容について学ぶ場合は、母語での知識や経験を使って外国語での授業中は、多少の勘違いや間違いが起こることは日常茶飯事なので、児童同士が教え合ったり助け合ったりする雰囲気生まれることが多く、ある教科に苦手意識を持つ児童でも失敗を恐れずに大胆な挑戦ができるという利点もある。CBI/CLIL授業では、このような児童の積極的な態度・学習意欲を活用して、教科や単元を復習・練習することにより苦手教科を克服することが可能となり得る。

教材研究・教材作成時間の短縮ができる

CBI/CLIL授業では、教科指導のために準備した教材を、そのまま英語の授業に応用することができる。例えば、教科書の中にある、年表、写真、図、グラフ、表などは、児童全員が持っているの、改めて用意する必要がない。教室に貼ってあるポスターや大きな地図は、普段から目にして見慣れているので、それらに関する質問の答えはすぐに見つけられる。栽培中の植物は、リアルタイムに観察できるし、大きさ、色、手触りも本物である。生教材や実物を素材にすることは、児童にとっても楽しく、実際に触ったり体感しながら使った英語は、体で学ぶことができる。他教科の授業で見たこと、使ったことのある教材を英語の授業で使うことは、児童の英語理解をスムーズにするだけでなく、普段日本語の授業でその教材を使っている時とは目線が変わり、新鮮な気分が復習・再確認ができる。すでにある教材を使用することで、教師は、英語授業のためだけの教材研究・作成の時間を削ることも可能となる。

担任教師が児童のロールモデルになれる

子供たちの前で英語を話す担任教師は、日本人の大人が英語を話すモデルとなる。吉田 (2010) は、ALTや外国人英語教師が英語を話すのは当たり前だが、日本人である担任教師が英語で授業をする姿は、児童にとって格好良く見えるものだとして述べている。多くの小学校担任教師にとって、コミュニケーションのための英語を自信を持ってスラスラと話すことは難しいのが現状だが、CBI/CLIL授業では、普段教示している教科内容を題材にするため、担任教師は到達目標や教授方法について熟知しており、使用する教材にも慣れている。この余裕から、外国人教師のように流暢な英会話ができなくても、深い内容を教えられることで、担任教師は英語の授業に対して自信を持つことができる。児童は、外国語でも堂々とアカデミックな内容を教える日本人担任教師を見て、尊敬の念を抱く。児童から「英語で頑張っている先生を応援したくなる」というコメントがあったが、外国語で一生懸命内容を伝えようとする担任教師の姿が、児童のロールモデルとなり、英語を学ぶ内的動機を高めることがある。

CBI/CLILで小学校英語を指導する際のコツ

英語を指導する際に、小学校の担任教師がまず不安に思うこととして、教師本人の英語力不足がある。英語を流暢に話せる、または英語を専門的に教えられる小学校担任教師は多くない。CBI/CLIL授業に至っては、教科内容を教えるほどの英語力が自分にはないのではないかという不安を持つのは当然であるし、児童の母語である日本語で教えてさえも難しいような教科内容を、いかにして外国語で理解させることができるのか、という疑問もあるだろう。このような公立小学校の現状を踏まえた上で、CBI/CLIL授業を計画、実践する際のコツを以下に5つ挙げる。

ティーチャー・トークをうまく活用する

第一のコツは、学習者のレベルに合わせて、やさしい英語を使うことである。渡辺、池田、和泉 (2011) が、CLIL授業では学習者が内容を理解することが重要であるので、ゆっくりとわかりやすい発音で、使用頻度の高い語彙を使い、短い文で、母語も使用したティーチャー・トークを使うことを推奨しているが、筆者らも同じ見解である。教師が英語の授業で繰り返し使うクラスルーム・イングリッシュ並びに、目標語彙と目標表現は、教師本人が無理なく使いこなせる英語のみを精選して使用することが大切である。

既習済み事項を盛り込む

第二のコツは、日本語で既習済みの教科内容を盛り込むことである。児童は、すでに経験した内容ならば、簡単な英語の説明だけで教師の意図を理解できるはずである。たとえ既習事項であっても、仲介言語が日本語から英語に変わるため、児童は再度の重複練習とは感じない。普段は「英語は苦手だな」と感じている児童でも、ピンと来る既習の内容が見つかることで「あ、これ知ってる!」と理解するきっかけを得られる。英語でのインストラクションでも理解できた気持ちになり、理解する事に前向きになることで実際の習得に繋がることになり得る。1学期の間によく理解できなかった教科内容を、2学期に英語で再度学習することにより、スパイラル的に教科学習に取り組め、学習の定着度を上げることにもつながる。本来CLILでは未習内容を扱うが、日本の多くの公立小学校においてはハードルが高すぎるため、まずは既習内容を盛り込むことを提案する。

挑戦できる内容を扱う

第三のコツは、使う英語はシンプルでも、内容は少し難しい位のものを扱うことである。調べてみたり考えてみないと答えが出ない、チャレンジングな内容にすることで、児童の「面白そう! やってみたい!」という学習意欲を高めるのである。例えば、Hi, Friends! 1, Lesson 7で、“What’s this?”という表現を練習するために、教師がピアノの絵カードを提示しながら“‘What’s this?’と質問し、児童に‘It’s a piano.’と答えさせるやり方は定番だが、このような単純な活動では、高学年児童の思考活動は刺激されない。例えば、ピアノの代わりに立方体の展開図を示して、“‘What’s this?’と質問すると、児童は、展開図を組み立てるとどんな立体になるのかを考えた上で、“‘It’s a cube.’と答える。この考えるというプロセスにおいて、児童は分析や推測を必要とする。ここでの‘It’s a piano.’と‘It’s a cube.’は、文型上同じだが、‘It’s a cube.’は、考えた結果わかったことの発話であり、意味を持った内容のある発話となるのである。

本物を素材にする

第四のコツは、仮想の「ごっこゲーム」をなるべく避けることである。例えば、“What would you like?” “I’d like a hamburger.” “I’d like a pizza.” という表現の練習をするために、レストランを設定して「注文ごっこ」をしたり、“I’m sad.” “I’m happy.” “I’m hungry.” という感情表現を練習するために、悲しい顔をさせたり、お腹がすいたジェスチャーをさせたりすることは、外国語授業ではよくある。しかしながら、このような活動は、仮想上の作られた状況設定で、教師により求められる答えを児童が発する言語活動であって、あくまでも練習のための英語活動にすぎない。高学年児童においては特に、事実に基づく、児童本人が自発的に発言したいことを言う言語活動に重点を置きたい。そのためには、本物を素材にすることが大切である。

文法説明は暗示的にする

第五のコツは、明示的に文法の説明をしないということである。授業の冒頭で、例えば、「今日は、立体の英語の言い方を勉強します。sphereは、球という意味です。球の物を見つけIt’s a sphere.と言って下さい。円錐は英語でpyramidと言います。では、円錐の物を見つけたらどう言いますか?」と、日本語で文法や活動のやり方を解説するのではなく、授業を進めるうちに自然とやっていることの意味が理解できるように授業の流れを作ることである。外国語でコミュニケーションをする楽しさは、相手の意図を理解しようとして必死で聞き、相手のしぐさを観察し、伝えようとしている内容を探るうちに「あ、そういうことか!」と「気づく」ことである。文法項目は暗示的にして、児童の気づきを待つことが小学校英語では大切なことである。

CBI/CLILの指導案サンプル

2012年から公立の小学校では、文部科学省が配布したHi, Friends!を補助教材として使用することになった。それに伴い、筆者らは、Hi, Friends!で扱う語彙、または表現を応用して、高学年(5・6年生)で学ぶ教科科目・単元内容を盛り込んだ指導案を作成している。本論では、その中から5つを紹介する。詳細は、付録Bに記載する。

1) Hi, Friends! 1, Lesson 5では、“What fruit do you like?” “I like bananas.” という表現を学ぶ。そこに国語で扱う外来語の単元を関連付け、“banana”は日本語で「バナナ」と片仮名で表すこと、「バナナ」は外来語であることを確認する。更に、他にはどのような外来語が使われているのかを考える活動にまで発展させる。(付録B「カタカナ語って英語なの?」参照)

2) Hi, Friends! 1, Lesson 7では、“What’s this?” “It’s a piano.” という表現を学ぶ。これを応用させ、“What shape is this?” “It’s a cube.”のように、算数の単元である立体の学習を加える。(付録B「Let’s find 3D shapes!」参照)

3) Hi, Friends! 1, Lesson 9では、“What would you like?” “I’d like a hamburger.” という表現を学ぶ。これを発展させ、“What would you like to do?” という質問をしながら、道徳の単元である公共での役割について考え、自分にできるボランティア活動を計画する。(付録B「公共のためにできることは?」参照)

4) Hi, Friends! 2, Lesson 4では、“Where is ~?”という場所の尋ね方を学習する。これを応用し、日本地図を見ながら色々な都道府県、県庁所在地、その土地の名産などを学ぶ。(付録B「Where is Takamatsu?」参照)

5) Hi, Friends! 2, Lesson 5では、世界の国名と、様々な人たちの様々な生活について学ぶ。この学習を発展させ、世界の子供たちの様子を本やインターネットを使って調べ、自分たちの状況と比較しながらその相違について発表する。(付録B「世界の学校では」参照)

おわりに

本論では、CBI/CLILを取り入れた小学校英語教授におけるメリットに焦点をあてた。2018年度には、公立の小学校では英語が教科化される予定で、今後小学校英語はますます多様化し、様々な教育者・研究者により、様々な英語教授法が提唱されるであろうが、CBI/CLILは小学校英語教育を豊かにする可能性を持っていると言えるだろう。

最後に、筆者らが今後の課題として考える、CBI/CLIL小学校英語の問題点を以下に挙げる。

1) 授業に母語が介入する率が高くなる傾向がある。つまり、内容を教えるには、児童の理解力に合わせて、部分的に日本語を使う必要がでてくることが多いからだ。例えば、指導案「カタカナ語って英語なの?」では、「カステラという語は、江戸時代に日本にやってきたポルトガル人が持ってきたお菓子の由来する」という内容を、教師が全部英語で説明して理解させるのは難しい。この問題点は、児童のアウトプットにおいても同じで、例えば、調べ物学習でわかったことを全て英語で発表することは難しいため、日本語を使用する必要が生じてしまうことが多い。

2) 目標語彙・表現の難易度が高くなりがちである。これは、教科に関連した内容など特殊なテーマに関連する語彙を使うためである。例えば、指導案「Let’s find 3D shapes!」では、児童は、“sphere”や“cylinder”などの専門的でレベルの高い語彙を学ぶが、これらの語彙は、日常語彙・表現を扱うHi, Friends!の枠を超えてしまう。この点は、CBIやCLILといった内容と言語を統合させた教授法の特徴であり、小学校での英語活動に落とし込むときの基本的課題でもある。

3) コミュニケーション言語が育ちににくい。つまり、内容を重視するために、児童同士の個人的な嗜好や気持ちなどを聞き合うような、個人的な言語活動の場が減る傾向にある。大雑把に言えば、CBI/CLILを取り入れた授業では、CALPを育成しようとするが、BICSには焦点があたりにくい、ということである。

4) 授業評価が難しい。この研究では児童からのフィードバックを参考にしたが、児童のコメントは一律に「楽しかった」というようなシンプルなものが多かった。小学生児童に分析的で客観的な授業評価を求めることは難しい上、児童は授業内容や担当教員に対してネガティブなコメントをしない傾向があり、これらのフィードバックに評価としてどれだけの信頼性があるのかについては疑問の余地が残る。より信頼性の高いデータを使った評価方法による、CBI/CLIL授業の効果を計る研究のためには、小学校現場でのCBI/CLIL授業の実施を今後も続けていく必要がある。

引用文献

- Baker, C. (2011). *Foundations of bilingual education and bilingualism*. Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Brinton, D. M., Snow, M. A., & Wesche, M. B. (2003). *Content-based second language instruction*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- カミーズ・ジム. (2011).『言語マイノリティを支える教育』中島和子(訳著). 東京:慶応義塾大学出版会.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010). *Content and language integrated learning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Cloud, N., Genesee, F., & Hamayan, E. (2000). *Dual language instruction: A handbook for Enriched education*. Boston, MA: Heinle.
- Genesee, F. (1994). Integrating language and content: Lessons from immersion. *ERIC Clearinghouse on Language & Linguistics*. Retrieved from <<http://files.eric.ed.gov/fulltext/ED390284.pdf>>
- Lightbown, P., & Spada, N. (2006). *How languages are learned*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Lyster, R. (2007). *Learning and teaching languages through content: A counterbalanced approach*. Amsterdam, The Netherlands: John Benjamins.
- Met, M. (1999). *Content-based instruction: Defining terms, making decisions. NFLC Reports*. Washington, DC: The National Foreign Language Center. Retrieved from <<http://www.carla.umn.edu/cobaltt/modules/principles/decisions.html>>
- 文部科学省. (2012).『Hi, Friends!』. 東京:東京書籍.
- 笹島茂. (2011).『CLIL新しい発想の授業—理科や歴史を外国語で教える!』. 東京:三修社.
- Stryker, S., & Leaver, B. (1997). *Content-based instruction in foreign language education: Models and methods*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Takano T., Kambara, J., & Suzuki, Y. (2012). Elementary school English: Collaborate English lessons with subject area themes. In K. Bradford-Watts, R. Chartrand, & E. Skier (Eds.), *The 2011 Pan-SIG Conference Proceedings* (pp. 247-262). Matsumoto, Japan: JALT.
- 渡辺良典, 池田真, 和泉真一. (2011).『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦、第1巻原理と方法』. 東京:上智大学出版.
- 山野有紀. (2013).「小学校外国語活動における内容言語総合型学習 (CLIL) の実践と可能性」. STEP Bulletin, 25, 94-125. 東京:公益財団法人日本英語検定協会.
- 吉田研作. (2010).「小学校教員の意識の変化」『ベネッセ教育研究開発センター第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査)、第一部、解説提言1.』Retrieved from <http://benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/pdf/data_04.pdf>

付録A. 授業後アンケート

アンケート用紙

- ① 今回の英語の授業は、楽しかったですか (興味が持てましたか) ?
☐ とても楽しかった ☐ 楽しかった ☐ それほどでもなかった
- ② 楽しかったことは、どんなことですか?
 例: カードをかくして当てるゲーム

- ③ 英語だけの授業は、どうでしたか?
☐ とても良かった ☐ 良かった ☐ それほどでもなかった
 どのくらい、わかったと感じましたか?
☐ よくわかった ☐ だいたいわかった ☐ よくわからなかった
- ④ 今後英語の時間で、やってみたいことはどんなことですか?

- ⑤ 他にになにかあれば、書いて下さい。

付録B. Hi, Friends! に教科科目・単元を盛り込んだCBI/CLIL指導案サンプル

表B1. Hi, Friends! 1, Lesson 5+国語 指導案「カタカナ語って英語なの?」

言語目標 (英語)	好きな事物について尋ねる・答える。 様々な外来語の語源を調べ、発表する。
--------------	---

Takano, Kambara, Kedoin, & Suzuki: CBI/CLIL for Elementary School English: Benefits and Tips

単元目標 (教科)	外来語・片仮名語とは何かを理解する。 日本語の中にある様々な外来語に気づく。 色々な外来語の例を探し、その語源や歴史的背景を調べる。
目標表現	What do you like? → I like fruits. What fruit do you like? → I like bananas. Is “パン” English? → Yes, it is. / No, it isn't. / I don't know. “パン” is from Portuguese.
目標語彙	banana, apple, baseball, soccer, lion, gorilla, Portuguese, Dutch, etc.
主な活動	好きな食べ物・スポーツ・動物についてインタビューし、これらの語の多くが外来語として使われている事を確認する。 様々な外来語が何語に由来するのか、語源と歴史を辞書やインターネットで調べる。 調べてわかったことをグループで発表する。

表B2. Hi, Friends! 1, Lesson 7+算数 指導案「Let's find 3D shapes!」

言語目標 (英語)	立体の名前を尋ねる・答える。 身の回りの様々な建造物が、どんな立体なのかを話し合う。
単元目標 (教科)	身の回りの文房具などを立体ごとに分類する。 立体とその展開図を一致させたり、人間立体を創作することで、それぞれの立体の特徴を理解する。 身近な建物や有名な建造物が、どのような立体なのかに気づく。
目標表現	What shape is this? → It's a cube. Is this a sphere? → Yes, it is. / No, it isn't. / Almost.
目標語彙	pen, glue, ball, building, sphere, cube, cylinder, cone, pyramid, etc.
主な活動	身の回りや教室内の立体物(例:スティックのり)を分類し、その立体(例:円柱)の特徴を確認する。 様々な展開図を見ながら、組み立てるとどのような立体になるのかを考える。 グループで相談しながら、人間立体を創作する。 学校内や近所の建造物を観察し、どのような立体が組み合わされているのかを話し合う。

表B3. Hi, Friends! 1, Lesson 9 + 道徳 指導案「公共のためにできることは？」

言語目標 (英語)	やってみたいボランティア活動を尋ねる・答える。 その理由を述べる。
単元目標 (教科)	「集団における役割と責任」について知り、身近なボランティア活動の例を調べる。自分たちにできる・したい事を考える。
目標表現	What would you like to do? → I'd like to clean up our tsugakuro. Why? → Because I use it every day.
目標語彙	help, clean up, plant flowers, pick up, recycle, etc.
主な活動	集団生活をする上で必要な役割について話し合う。 自分たちができるボランティア活動を考え、計画を立てる。

表B4. Hi, Friends! 2, Lesson 4 + 社会 指導案「Where is Takamatsu?」

言語目標 (英語)	出身地を尋ねる・答える。 方角、県庁所在地、名産品を述べる。
単元目標 (教科)	日本の都道府県・都市の位置を日本地図で確認し、県庁所在地を覚える。方角(東西南北)を理解する。
目標表現	Where are you from? → I'm from Takamatsu. Where is Takamatsu? → It's in the west of Japan, the capital city of Kagawa, famous for Udon.
目標語彙	east, west, south, north, capital city, etc.
主な活動	児童や有名人の出身地を聞き、その都市の位置を地図で調べ、東西南北を使って方角を言う。 県庁所在地を確認し、名産品などを調べ発表する。

Takano, Kambara, Kedoin, & Suzuki: CBI/CLIL for Elementary School English: Benefits and Tips

表B5. Hi, Friends! 2, Lesson 5 + 図書・情報 指導案「世界の学校では」

言語目標 (英語)	大陸・国・地域などの名前を言う。 自分たちの環境と比較しながら、調べたことを発表する。
単元目標 (教科)	外国と日本の子供の生活や習慣の共通点・相違点を知る。 参考図書やインターネットを使い、必要な情報を検索する。
目標表現	We studied about Germany in Europe. We have school lunch/uniforms. They don't have school lunch/uniforms.
目標語彙	Asia, Africa, Europe, America, Russia, China, India, Brazil, etc.
主な活動	日本の小学生の生活について、話し合う。 グループごとに調べたい国を決め、その国の学校制度や小学生の生活について調べ、自分たちとの相違点を発表する。